口演速記

明治大正落語集成

第四巻

講談社

N.D.C. 910　540P　22cm

口演速記明治大正落語集成　第四巻

定価　二千五百円

昭和五十五年七月三十日　第一刷発行

編　者　暉峻康隆　興津要　榎本滋民

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一

郵便番号一一二　振替　東京八―三九三〇

電話　東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）

印刷所　凸版印刷株式会社

製本所　藤沢製本株式会社

©講談社一九八〇年

＊落丁本乱丁本はお取りかえいたします。

0393-441841-2253(0)（文芸局）　Printed in Japan

口演速記 明治大正落語集成 第四巻 目次

橋場の雪……柳家小さん　七
りんきの独楽……柳家小さん　一七
百人坊主……橘家円喬　二九
三で賽(さい)……柳家小さん　三八
欲しい物覚帳……橘家円喬　四九
相撲の蚊帳……柳家小さん　五五
いもりの間違ひ……柳家小さん　六三
出来心……柳家小さん　六九
狂歌家主……橘家円喬　七八
三百餅……春風亭小柳枝　八四
暦の隠居……橘家円喬　九七
福之神……柳家小さん　九九
花見趣向……橘家円蔵　一〇三
茗荷屋……柳家小さん　一一三
富久……柳家小さん　一一九
たがや……橘家円蔵　一三一
雛鍔(ひなつば)……柳家小さん　一三七
錦の犢鼻褌(したおび)……橘家円蔵　一四三
汲立て……橘家円蔵　一五五

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

禁酒の番屋……柳家小さん 一六四
お若伊之助……春風亭柳枝 一七一
武助馬……柳家小さん 一九〇
臆病源兵衛……柳家小さん 一九六
唐茶屋……桂　文治 二〇五
昔の詐偽……春風亭柳枝 二一三
新宿三人遊……桂　文治 二三八
夢の株式……三遊亭円遊 二三七
躰内旅行……三遊亭円遊 二四五
自称情夫……橘　家円蔵 二四九
猫の忠信……桂　文治 二五六
春の新築……三遊亭円遊 二六五
田能久……橘　家円蔵 二六九
繋馬（つなぎうま）雪の陣立……桂　文治 二七六
阪東お彦……橘　家円蔵 二八二
旅順の釣上げ……三遊亭円遊 二九七
孝行娘……桂　文治 三〇一
正直……春風亭柳枝 三一二
神仏論……春風亭小柳枝 三一八

江戸見物……桂　文治　三三
春雨茶屋……橘　家　円　蔵　三三一
新治療……三遊亭小円遊　三三七
後生鰻……橘　家　円　蔵　三四六
競三人似顔鞘当（くらべてみつにがほのさやあて）……桂　文治　三五〇
近江八景……春風亭小柳枝　三五八
犬の目……橘　家　円　蔵　三六三
芝居好の泥坊……桂　文治　三六九
蚊の軍（いくさ）……柳　亭　左　楽　三七四
本能寺……桂　文治　三七九
松竹梅……柳　亭　左　楽　三八七
洒落小町……春風亭小柳枝　三九二
芝居と帯……桂　文治　三九七
恐い物……柳　亭　左　楽　四〇四
無学者……春風亭小柳枝　四〇九
無学者……春風亭小柳枝　四一七
団子平……桂　文治　四二三
手飼の犬……柳　亭　左　楽　四三一
縁結び浮名の恋風……桂　文治　四三六

紺屋の思染め……柳亭左楽 四四七
入黒子（いれぼくろ）……桂　文治 四五六
出刃庖丁……柳亭左楽 四六八
妙な艶種……柳亭左楽 四七五
宝莱……桂　文治 四八三
仲人役……柳亭左楽 四八八
龍の都……春風亭小柳枝 四九四

演目解説　暉峻康隆／興津要／榎本滋民……五〇〇
演者小伝　暉峻康隆……五三七

●本巻は「百花園」の百七十四号（明治二十九年七月）から二百十八号（明治三十二年一月）までの落語六十四話を収める。なお、校訂については、第一巻巻末の「校訂基準」を参照されたい。

橋場の雪

三代目 柳家小さん 口演
加藤由太郎 速記

ヱ、焼餅のお笑ひと云ふものは折節出まするやうで、悋気と云ふものは女の謹まんければ不可んと申しますが、男女共に大小御焼餅と云ふものが御座います。此りやア何かと云ふと、夫婦の中には情合ひが無ければ成らんもので、殊更良人を一度持ちまするとと再び持つ事の出来んと云ふ、貞女両夫に見えずとか云つて、御亭主が御大切で外に増花でも出来たとか出来ては成らんとか云ふので焼くので御座いますが、其中に酷く此、御悋気の濃い方と薄い方とあるとか申しますが、成程考へて見ると淡白は誠に宜しいものだが、何うも黒つ焦げに焼いて仕舞ふ。八釜敷と云はれると男はエコジなもの。

甲「ア、忌々敷い……」

と云ふので腹が立つと云ふ処から、纏つたお金子でも持出して三日に使ひ果して帰ると云ふ。御身上の為に成らんから八釜敷く云ふのだとか申ますが、考へて見ると男は我儘なもので。尤も亭主関白の位あり、女房と畳とは新らしいのに限ると云ふ怪からん事を申しますが、当今は女でもつて何の某と云ふ標札を掛けて一戸張る事の出来る世の中ですから、男女同権とか云ふ事に成つて、女だからと云つて然う白痴に出来るもので無い。女と云へば端た人間の様に成つて居つて、焼餅を焼いては成らんと云へば焼く事が出来んと云ふ。聖人も悋気は深く戒めて御座います。悋気嫉妬を去るべしとあるが、中に悪しき病あれば去るべしと云ふのは好う御座いますが、其中に三年添ふて子無きを去るべしとあります。女房「三年添つたが子が出来ないから、無き縁と断念めて、子が出来る積りで来たんですが、ちやア御暇をいたしませう」と出て行くお内儀さんもありますまひが、中には子のあるのを去ります。

亭主「何をグス〳〵泣ツ面を為て居やアがるんでい、出て行け。子供は此方のもんだ。腹は借りもんだ」

借り物で子が出来る訳のもんでありませんが、男の方が割が能く出来て居ります。女が亭主の外に男を拵へて御覧じろ、夫れこそ亭主が大変な騒ぎに成ります。其処へ行くと男は間女だらけで、御内儀さんが御承知の上で御妾があつて其外外に外妾がある。女郎に買馴染があつて芸者がある。其上又飯炊きに手を付けると云ふやうな怪らんのが、世間に随分あります。夫れでも別段に咎られると云ふ事でも何んでもありません。シテ見ると一割も二割も御女中の方が割が悪く出来上がつて居ります。女は罪深きものだと云ふ、吾々には其罪と云ふものが一向分りませんが、男を迷はせると云ふ罪が軽からんものだと云ふけれども、此は別段に女の

方で迷つて呉れと女が方々を頼んで歩く訳でもありません。男の方で迷ふのは男の随意で、無関係だと云へば一言も無い話でありますが、兎に角女は割が悪く出来て居ると云ふのはお気の毒な訳のもんですが、中に濃いと薄いのとあります。何処までも御婦人は恪気は慎まなければ成りません。

旦那「清や、湯豆腐を拵へて呉んな。何うも寒いなア強く……一杯熱く燗けて、巨燵に本を読んでるから持つて来てお呉れ、一杯遣る事に為るから」

と旦那は巨燵に座睡りを為ながら当つて居たが、遂〻俯伏して仕舞ひました。

男「ヘイ、旦那様々々」

旦「ヱ、誰だ」

男「ヘヱ」

旦「誰だい」

男「ヱ、私……」

旦「ヲヤ〳〵誰かと思つたら幇間の次郎八か。何う為て斯んな所へ這入つて来た。此離れへ貴様が来る訳は」

次「ヱ、実は、小僧さんがお庭口を掃除を為てお出でなさるから、旦那はと聞くと気の利た子僧さんで、宜しうがすと斯う被仰いまして此方へ御案内下さいまして、夫れから……」

旦「何う為た」

次「ヱ、」

旦「何う為た」

次「何うも実に、花魁が貴郎の事計り云つて入しつて困ります。芸者と違つてヒョコ〳〵出掛ける訳に参りません。仏参と云つて廓を抜けて、向島の中の植半で御待ち申すからと斯う云ふ何んでげして、其故鳥渡御使ひに来ました」

旦「夫りやア大きに御苦労だつた。ぢやア瀬川が待つて居るんだな」

次「中々仏参と申すやうな訳ですから、暇を取る訳に不可ませんから、是れは御手紙で御坐います」

と差出だす手紙を開いて見ると、今幇間の云ふた通り、急に来て呉れと云ふ、自分が惚れ抜いて居る右の花魁からの文通なんだ。

旦「貴様は何う為る」

次「ヘヱ」

旦「何う為る」

次「御一緒に……」

旦「イヤ御一緒と云つた所で内所でヒョイと出る訳に行かねへから、何処へか往つて待つてろ。橋場の渡しか。好し〳〵渡船場なら渡船場へ往つて待つて居れば直きに行くから」

と次郎八を先へ返して旦那は悉皆仕度を為て、御新造の前は用達と云ふ。如何程恪気嫉妬でも、用があつて出掛けると云ふのでは詮方が御坐いません。ぐうツと出掛けるとチラ〳〵と雪が降り出した。

旦「アヽー寒い〳〵。遂〻降つて来やアがつた。斯う云ふ時に雪は雨と違つてボーンと袖を振へば夫れで済むだけに好い。ハテな

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

……橋場の渡船に待つてると云つたが那の野郎粗々つかしいからなア。何処へ往ちまやアがつた。アヽー降るなア此ビュー〳〵風にチラリ〳〵と雪の顔に当る奴は、酒に酔つてる時は好いけれども素面じやア寒いなア。此渡船の向ふまで渡る事かと思ふと余計寒い……モシ〳〵船頭さん、此処等に幇間がありやア為ませんかなア」

船頭「幇間が」

旦「ヘエ」

船「太鼓なら手遊品屋へお出でなさい。少し跡へお戻んなさい」

旦「幇間で……」

船「可笑いなア此人は、商人屋は此辺にはありませんヨ」

旦「買物ぢやア無いんで。待つてる筈だが……ありがたう存じます。分らねへや、詮方が無へなア……ハテナ斯んなに雪が降つて居るのに乃公の身躰に雪の掛らんてへのは変梃だ……ヲヤツ此りやア何うも恐れ入りました。誠に何うも相済みません。斯んなに強く雪が降つて来るのに雪が掛らないのは何う為たかと思つて居りましたが、誠に恐入りまして御坐います」

女「何ういたしまして。余まり此処に立つて入つしやるから、強くお身躰へ雪が掛りますから御差し掛け申しましたが、貴郎此方へ入つしやいまし。妾も唯今仏参の帰りでね……きくや、最前から見て居るけれども真実に能く似て入つしやることねへ。斯ふ云ふ方と心床かしにお茶の一口も飲んだら好い心持が為るだらうと思つて……鳥渡門口から御寄り下さる訳には参りませんか。

下女と妾と二人暮しで御坐いまして、実は今日仏参の帰り、恰好三年に成りまして。其無くなりました宿が貴郎に誠に其儘と云はうか其人が其処へ来たと云はうか、真実に能く御似申して居ることねへ。御急ぎでなければお茶を一ト口差上げたく」

旦「有難う存じます。少し用がありまして、急いで向ふまで行かなければ成らないんで、帰りに御寄り申すことにいたします。ヘエ何うも有難う存じます。ヘヽエ左様で……」

女「切望是非……此渡船を向ふから渡つてお出でに成れば、角から二軒目の、松の木が出て居りまして新しい家で。是非一ツ御寄り下さいまし」

旦「何うも有難う存じます」

女「お傘をお持ち遊ばしては……」

旦「イエ、此処を渡るだけでゲスから宜しう御坐いますヨ」

女「では屹度ですヨ」

旦「宜しう御坐います。是非御寄り申します」

と船へ乗りまして

旦「間の好い時は好いもんで、花魁が迎ひに来る、那の女が乃公に……トン〳〵拍子に斯うも間が好く打付かつて来るものか」

とニコ〳〵顔で旦那は渡しを渡つて向ふへ着き、中の植半へ来て見ると花魁も何も来ちやア居ない。次郎八も尋ねたが更に分りません。内に雪はドンドン降つて参りました。

旦「エ、詮方が無いなア、何うも……コレ〳〵其処へ来たのは捨松ぢやア無へか」

捨「ヘエ捨松で。旦那が嘸御困りだらうと存じて御傘と合羽を持つて参りました」
旦「乃公が此処へ来て居る事を家の奴が知つて居たのか」
捨「然うぢやア御座いません。幇間に私は逢ひまして」
旦「エ、、幇間に逢つた」
捨「ヘエ」
旦「何処で逢つたヨ」
捨「ヘエ」
旦「何処で逢つたのだい」
捨「実は私はお離れ座敷を掃除為て居ると次郎八が来て、是れ是れで向島へ来て呉れろと申して居つた故、存じて居る人で、ヘエー嘸御困りだらうとそんじまして持つてまゐりましたが、何うも色男……」
旦「何んだ、余計な口を利きやアがつて。然し気転の利た小僧だ。今日は無駄足を為ちまつて格別色男でも無い。貴様は傘無しか」
捨「ヘエ私は傘は要りません。主人に貰つた腐つたやうな……ヘエナニ、誠に有難い主人で腐つた時分には着替へをして呉れるから有難いと、斯う思つて」
旦「言ひ直しやアがつて。何為ろ茶の一杯も飲まして遣りてへが此雪ぢやア詮方が無へ。乃公と一緒に渡船を渡れ。向ふ河岸に少し行かなくつちやア成らねへ所があるんだア……船頭……ヲイ渡船場の船頭、居るんだか居ねんだか分らねへ、ヲイ」
老人「ヘエ何んだね」
旦「向ふまで渡して貰いたいがね」
老「船頭は居ねへ」
旦「和郎が居るぢやア無へか」
老「私船頭で無へ。船頭はハア馬鹿囃しの稽古に往つちまつて容易には帰らねへ。箒塚の方迄往つたんでゲスから。私イ菓子を売つて歩く爺イさんだがね」
旦「ヲヤ〳〵……けれども和郎も此辺を歩いて居る者だから、鳥渡向ふ河岸位へ漕げそうなもんだねへ」
老「無益でがす。船へ斯ふ遣つて留守番を頼まれて乗つて居てせへ余まり好い心持が為ねへ私だもの。夫共難船為る了見なら漕で遣るべい」
旦「難船為せて堪るものか。詮方が無へなア。全躰船頭の癖に馬鹿囃しの稽古なんぞに行かなくつたつて好いんだ」
老「乗つて帰りを待つて居たら好かんべい」
旦「待つて居た処が何時帰るか知れやア為ねへ。向ふで手招きを為て居らア、捨松」
捨「成程、女が二人で二階から呼んで居ますね。引張だこ」
旦「片ツ方は下女だ。家へ往つて斯んな事を云つちやア不可ねへぜ。船頭せへありやア直ぐ渡れるんだが、行きてへなア」
捨「私が漕ぎませう」
旦「貴様は船が漕げるか、商人の子僧で居ながら」
捨「貴様は御存知御坐いませんが、私は深川で育ちました。親爺は船頭で、何んの河を向ふへ越す位朝飯前の仕事で、訳無しで

ゲス」
旦「然うか夫りやア有難い……ヲイ菓子屋の爺イさん、和郎少し船を出て立つて待つて居て呉んねへか、船賃を遣るから」
老「船賃抔は要らねへのさ」
旦「済まねへなア、少しの間だから」
老「サ出ました」
旦「有難う。サ、捨松漕いで見な」
捨「畏まりました」
旦「大丈夫か」
捨「大丈夫、訳無しでゲス」
旦「ヲ、旨い〳〵、恐れ入つたもんだ。大変旨い。腰つ付きと云ひ何うも恐れ入つたもんだ」
捨「棹は三年もやりますがな、私は子飼ひから遣つて居りますから」
旦「未だに子飼ひぢやア無へか」
捨「モー中貝ですヨ」
旦「旨いもんだ。櫓は三月てへ事を云ふな」
捨「旦那、船が当りますヨ」
旦「生意気を云ふな、当るも当らねへもあるか。サ、此りやア貴様に船賃だ。此船は向ふまで漕返して置いて遣らなければ成らない」
捨「宜しう御座います。旦那お娯み。色男……」
旦「何うも貴様は生意気で不可ねへ。年も行かねへ癖に……」
捨「ヘイ」
旦「御免下さいまし」
と門口へ立つて、中から下女が飛出して来て
下「サ切望此方へ」
女「御遠慮被為ちやア不可ません。誠に先程は失礼をいたしましたが、真実に妾は思ひ出して世の中に似た方もあればあるもんだと尽く〳〵考へて居りましたから、御帰りに御寄り下さるか何うだかと唯今も申し暮らして居つた処、能うマア御寄り下すつて……サ切望……お茶と云ふのも何んで御座いますから、御酒を一盞」
旦「イエ恐れ入ります。然んなに御馳走様に成りましては何うも……何分強い降りでげして」
女「傘位ゐ御貸し申しても宜しう御座いまするし、又御急ぎでなければ座敷も明て居りますから、御泊り被為て雪を止めてから御帰りなさいまし。イエ、誰も憚かる処も何んにも御座いません。此通りたて切り」
旦「イエ却て御女中斗りでは、私が極りが悪う御座います」
女「然んな事を被仰らないで。泊つて入つしやるなら、淋しくつて詮方の無い所でありますから御泊んなすつても宜しう御座います。切望此方へ……」
と二階へ上がつて見ると、悉皆モーお座敷に仕度が出来て居つて、大変に御馳走に相成りました。其処は此方も遊び付けた人でありますから、此奴は色仕掛けだなと斯う考へました。

女「マア貴郎、然んな御遠慮をなさらないでモー一ツ召上がれ」
旦「イエモー沢山頂戴仕りました。イエモー少し頂きますと頭痛がいたして参つて……」
女「ヲヤ、夫りやア不可ませんねへ。ぢやア此方へ入つしやいまし」
旦「ぢやア少々恐れ入りますが御邪魔をいたします」
と次の間に来て見ると、座敷の様子よりモー床抔敷べてありまして、煙草盆へ火がいかりお茶も来て居りまして、床の間に掛けたる軸、花の様子、何から何迄充分に行き届いて居りますが、傍に文台がありまして、見ると短冊が一枚乗つて居る。
　声もせで身をのみ焦す螢こそ
と書いてある。
旦「ハテナ……」
と考へて居る所へ、這入つて参つたる彼の年増
女「誠に失礼をいたしました」
旦「今日は飛んだ御厄介に……」
女「何ういたしまして。アレ夫れを御覧なすつたの。見ちやア不可ませんヨ」
旦「ヘエ、貴君が御書きなすつたので。お手と云ひお歌と云ひ、何から何まで御美事なもので。私は歌の意味は知りませんが」
女「アレ夫れは私の心持で御座いますヨ」
と云はれましたから
旦「此奴弥〻色仕掛けだな」
と思つたから
旦「恐れ入ります」
女「云ふよりまさる思ひなるらめで御座いますから、切望貴郎其お積りで……」
と男の傍へ摺寄りました。
内儀「モシ旦那……旦那……詮方が無いねへ」
旦「ア……ア、ツ……」
内「旦那、不可ませんねへ。湯豆腐が堅まつてしまひますヨ」
旦「ア……アイヨ、何うも色々相済みません。飛んだ今日は……」
内「何んですねへ、湯豆腐が堅く成つて仕舞ひますヨ、お燗が冷めて仕舞ひましたヨ」
旦「ア、ー、湯豆……何んだ」
内「何んだか知りませんが大変にうなされて居りましたヨ」
旦「寝たかい」
内「お寝りなさいましたとも」
旦「分らない事があるもんだなア」
内「何うなさいました」
旦「妙だ。（スー）橋場の渡船……恋はせで身をのみ……何んだ夢か、馬鹿々々敷い夢だ」
内「何うなすつたんです」
旦「何うも為やア為ないがね。幇間の次郎八……ア、那処から夢だな。私は先刻から此処に居たのかい、寝て……」

内「ハア」

〔「百花園」十八巻百七十四号　明治29・7・20〕

妻君「湯豆腐を拵へて熱く燗を付けて来いと被仰いましたから、其通り申付けて遠に出来ましたが、余まり好く御寝つてお出でに成るからお起こし申さずに居りましたが、大層うなされて何うなさいました」

旦那「アヽー然うか。夫ぢやア夢を見たんだ……好い女だなア」

妻「何ですつて……」

旦「好い女だヨ」

妻「何が好い女なんです」

旦「女の事と云ふと、直ぐに目に角を立つて何んとか彼んとか云ふぢやア無へか」

妻「ド、何んな夢を貴郎御覧なすつたの。何う云ふ夢を……」

旦「何う云ふ夢つて……幇間が来やア為ねへか」

妻「来やア為ませんヨ」

旦「ぢやア那所から夢だ」

妻「ド、何う云ふ夢を御覧なすつたので」

旦「イヤ話すのは止さう」

妻「ヘエ」

旦「話は止さう……」

妻「私に話す事の出来ない、何も貴郎御覧なすつた夢を話す事が出来ないてへのは、可笑いぢやアありませんか」

旦「然う顔の色を変へては困るなア。夫れぢやア話すがね、マア寝て居ると幇間の次郎八が来たんだ。其用向きは忘れちまつたが、何んでもマア向島の植半まで行く事があるんだ」

妻「ハア」

旦「其処でマア、橋場の渡船場を渡る積りで橋場まで往つたんだ。スルと雪がチラ〳〵降つて来たんだ」

妻「ハア」

旦「アヽ傘は無し雪はドン〳〵降つて来たし、困つたもんだと渡し場で船の来るのを待つて居ると、私の身躰に雪が掛らなくなつたのだヨ。ハテナ渇んだかと思つて見るとドン〳〵降つて居て、私の身躰にだけ雪が掛らない。変だと思つてヒョイと後を見ると、年の頃は三十に手が届くか届かんかと云ふ好い年増だなア」

妻「好い年増が何う為ました」

旦「傘を其年増が私に差し掛けて居て、傍に下女見たいなもんが尾て居るんだ」

妻「怪からん奴で御座います」

旦「向ふは深切に差し掛けて呉れたんだヨ。此りや有難ふ存じます、庇陰様で身躰に雪が掛りませんで、と……止さう然んなに顔の色を変へちやア困るなア」

妻「変へやア為ませんが怪からん奴ぢやア御坐いませんか。女の分際として、妻ある男に無暗に傘を差し掛けるなんて」

旦「夫りやア不可ないヨ。向ふは嘸困るだらうと思つて深切に為

て呉れたのだ」
妻「夫れから何う為ました」
旦「ぢやアマア止さうヨ」
妻「止す事は御坐いません。夫から何う為ました。妻に話せない事は御坐いますまい（泣声）」
旦「静かに為ねへな。ぢやア話すがな、其女が云ふには、何うも能く御似申して居ると、斯う云ふんだ」
妻「何んに似て居ると云ふので」
旦「死んだ良人に生き写しだと斯う云ふんだ」
妻「貴郎が其御亭主に……死んだ御亭主に似て居ると云ふんですね」
旦「然うさ。何んだか懐かしいから一服飲んで往つて呉れろと云ふんだ。お茶の一口も差上げたいからと斯う云ふんだヨ。所で此方も雪は降つてるし、余つ程直ぐ行かうとは思つたが何為ても先に用達を為て来なければ成らないから、帰りに寄りますと云ふので渡しを越えて用を達して、渡船場迄帰つて来たんだ。スルと此方河岸の渡しの角から二軒目の二階家から、先刻の年増に下女が首を出して手招ぎを為て居るんだ」
妻「ヘエ……夫れから何う為ました」
旦「乃公も往きたいとは思うたが、何為ろ船で渡して貰をうと思つて渡船場へ来ると、雪が降るのでモー船頭が居ないから遣れないと斯う云ふんだヨ」
妻「好い塩梅でした事ねへ」
旦「和女は悦ぶかは知らないが私の身に取つて見ると実に口惜い。切望為て渡りたいものだと立つて居ると、其処へ来たのは小僧の捨松だ」
妻「捨松が向島へ参りましたか」
旦「来たんだから詮方が無い……雪が降るから御困りだらうと存じて、合羽と傘を持つて来たと斯う云ふんだ」
妻「ハア……」
旦「捨松、此船を向ふ河岸まで漕ぐ工夫は無へかと云ふと、不思議なもんで成程考へて見ると親爺が船頭だ。ナーニ船頭の悴で御座いますから棹は三年、櫓は三月と云つて斯んな所を越すのは訳無しでゲスと斯ふ云ふんだ。夫から番人を暫く土手に待たして置いて、二人で船へ乗つて捨松に漕がして見ると中々旨へもんだ。忽ちの内に橋場へ着いたヨ」
妻「夫れぢやア何んで御座いますね、渡船場を御渡りに成つて其処の家へ入しつたんですね」
旦「折角先方で然う云ふものを無気にも出来んから其処の家へ這入つて行くと、イヤモー其待遇かたと云ひ大したもんだ」
妻「夫れぢやア其女の宅で貴郎、お酒でも召上がつたんで御座いますね」
旦「実に叮嚀に取扱つて呉れるものを、義理としても一杯や二杯は飲まなければ済まないぢやア無いか」
妻「然んな事を被仰るから不可ません。見ず知らずの者に義理も何んにもありやア為ませんがね」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com